

## Tonalestate 2015

私たちは15年以上前から毎年、イタリアのアルプスにあるパツ・デル・トナーレで約10日間のヴァカンスを過ごしている。そこからトナーレスターテの4日間が生まれた。トナーレスターテはその地の「トナーレ」と、イタリア語の夏「エスターテ」から生まれた名前である。

年齢や文化がまったく異なる私たちを、いったい何が一致させてくれるのか。それは「コンパニア」と呼ばれる深く存続的な友情である。私たちは、働き、学び、生活する国々の文化・社会的な現実にかかわっているが、この友情によってその奴隷や主人公になることはない。われわれも人々と同じように平和で自由な尊い世界を求めている。貧困や不正、戦争が存在しない世界を求めている。そのような世界を作るためには、まずわれわれが友情に結ばれ、一致し、自由と尊厳を守らなければならないと分かる。互いに個人の希望や要求を支える共存のあり方を認め、参加し、評価し、進歩させることができる。人間の希望や要求は様々な形で表現されるが、それは幸せへの要求であり、言い換えれば完全な自己実現への要求である。

毎年トナーレスターテはテーマを選ぶ。フォーラムにおいてテーマは様々なレベルで発展するが、個人の経験とテーマとの具体的なかかわりこそがすべてにおいて最も重要である。要するに、アカデミックを気取ったり、イデオロギーをふりまわしたりする、プロパガンダ的な仕事ではない。トナーレスターテは具体的な人間、個人あるいは共同体としての人間が主人公である。よって、無理やり答えを押し付ける場ではない。むしろ新たな道を開き、新たな問いかけを生み出す。そしていつも道徳として可能な希望を提案する。

“*Fiat voluntas mea*” (我がみ旨が行われますように) がトナーレスターテ 2015年のテーマである。この印象的なラテン語のフレーズは、すべての時代における人間のある特徴を示している。事実、どの時代の人間もこの言葉を現実にするために、手段を選ばないことがある。

副題は「全能の狂気」。今年のテーマを示しているが、非常に複雑な副題である。ではこのテーマに入るために、まずある明白な事実からスタートしよう。人間は自分の力を超える何かに惹かれる。むしろ抵抗を拒む何かに惹かれると言った方がよいかもしい。それは権力と世の中を手に入れたい強い欲求だ。古代の表現でこれを「原罪」と言う。すなわち自己中心である。その要求に負けると徐々にエスカレートし、「全能の狂気」に陥る危険がある。つまり、その手段が違法であろうか不正であろうか、たとえ犯罪を犯そうか、すべての特権を持つことが当然にあり、自分にはすべてを手に入れる資格があると思ひこむ。

このような悪を人間は頭と心の奥深いところに養っている。日常生活の素朴な出来事の中にも働き、人類の最も恐ろしい悲劇を起こす悪だ。思いを寄せる女や男を自分のものにする事、名誉や金を運ぶキャリアを必死に追求すること、自分勝手に支配できる空間を追求することだ。その追求が急進的になると、他人の富や土地、業を奪い、民族、すなわち男、女、子供の生活と植物と動物を破壊するという恐ろしい結果になる。

この歩みはどこに導かれているのか。人間は全世界を支配できたとしても、最終的に自分の求めていた幸せが手に入らなかったことに気づくだろう。それに驚き、疲れ、結局、自分は加害者でありながら被害者であることを発見する。人としての心が僅かでも残っているなら、その発見の前で泣くだろう。しかし狂気はすでに根を下ろしている。だからまた同じ過ちを繰り返す。いつもトップの支配者になるか、あるいは滅びるかという狂気なのだ。

この狂気から戦争が生まれる。1894年にアンリ・ルソーは、恐ろしい死を永遠に運ぶ少女の姿によって戦争を表現した。今年のトナーレスターテはこの絵をイメージとして選んだ。ピンクの雲、優しい青空、約束の地に見える丘、少女の白い服は平和と調和のうちに生きる美しさを思わせる。しかしすぐに息切れし、恐怖感を覚え、心を傷つけるイメージが現れる。枯れた枝、今にも落ちそうな黒い葉、馬に見えないほどおかしく狂った馬、死体、カラス、少女が握っている剣と旗のようにも見える風変わりな道具とその不気味な微笑み。すべてに動きがない。この絵を見ると、死体の下にある小さな石のように麻痺してしまいそうだ。まだ髪が黒い年かきの男と女は欲望と残虐に苦しめられ、命を奪われた。戦争とは残酷なもの。死、膠着、終りのない冬を作る。戦争は、ルソーの狂気に満ちた不安定な少女と同じように無慈悲なものだ。真っ白な並びの良い歯とその笑みも身の毛がよだつ。走りぬける彼女の悲劇と恐ろしい喜びを際立たせるからだ。ルソーの絵は、私たちが小さくなるように導いているかに見える。一瞬立ち留まり沈黙し、心の奥深く宿る全能の狂気から距離を保つように。本心から笑えないあの少女の曖昧さとは異なり、われわれの走りが孤独ではないように。

しかし恐怖感を覚えても、人類は残念なことに様々なイデオロギーや理屈に満ちた論理でカムフラージュし、戦争と無慈悲と残酷さを結局利用するのだ。しかも、不正、差別、不平等、富の不正分配、法律による不公平さ、われわれのエゴや暴力、悪をまことしやかに正当化する。虐殺、ジェノサイド、歴史や個人の人生における不条理、惨状はそこから生まれる。そして忘れてはならないことがある。裸の王様は褒美をもらい、あの怪物のごとき少女は妨害もなく自由に海を渡る。

なぜ人間は敗者にならず勝者になるより他がないと思うのか。支配されることなく支配するしかないと思うのか。なぜ自分の過去と現在と未来に虚栄心しか思い浮かばないのか。

自分の中にも、また外でも多くの悪を生む全能の狂気を正す方法はあるのだろうか。そこでパーシ・ビッシュ・シェリーが助けてくれる。『鎖を解かれたプロメテウス』によってシェリーはわれわれに警告する。ジュピターのようにならないために。「全能でありながら友のない」。プロメテウスのストーリーはあらゆる時代にあらゆる方法で語られた。シェリーの解釈はわれわれのテーマに相応しいのではないだろうか。プロメテウスはジュピターの暴虐（政治的な独裁の象徴）を打ち負かすために、根気強い対話と勇敢な戦いを望む。ジュピターは彼にへつらうが、プロメテウスはその言葉に耳を貸さない。シェリーのプロメテウスは、勇敢で抵抗ができ、自由な想像力と愛することができる頭脳と心を持っているからだ。同じようにわれわれの想像力、心、頭脳も自由になれるだろう。もしわれわれが不健全な迷路から閉じ込めているものを解放するなら、シェリーのプロメテウスと同じようにわれわれも自由で、勇敢になれるだろう。尊大なる全能の淵に安易に流されず、<sup>もうじゅう</sup>盲従的な卑怯さや何も行動しない単なる不満にも陥らない。しかし非常に注意が必要だ。プロメテウスは100%良い者だが、人間は一人では不可能だ。むしろ自ら悪化させ、そのうち不秩序なプロメテウスになるという危険性がある。傲慢という罪を犯し、自分と他人の敵になってしまう。残念なことに、このようなプロメテウスを日々見かける。すべての絆を絶ち、愛する者や愛されている者さえ殺せるプロメテウス。しかし、われわれは彼と同じようにはならない。したがって、われわれの想像力が目を覚まし、プロメテウスをジュピターに変える全能の狂気の誘惑に負けず（トナーレスターテはその助けとなる）、愛を持って働けるように願いたい。ここで一つ決めないといけないことがある。われわれがいつも共に行動し、友を作るためになりますように。